

学生の《子ども・人》の成長と発達を支援する 職業のコア・イメージとは？

小沢 日美子・上原 江未里

九州女子短期大学子ども健康学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2012年11月8日受付、2012年12月13日受理)

要 旨

近年、《子ども・人》の成長・発達に関わる教育や医療・福祉の現場では、より専門的な対人支援力の向上が求められている。その養成においては、それぞれの職業を目指している学生が形成している職業観を知ることは大変重要である。ここでは、養護教諭・幼稚園教諭の2つの役割に注目した。そして、学生の職業観の実態を明らかにして、《子ども・人》の成長と発達を支援する職業のコア・イメージの検討を試みることを目的とした。調査協力者は、A短期大学の養護教諭養成課程194人(調査1)、幼稚園教諭養成課程160人(調査2)の354人である。専攻および学年ごとに質問紙を用いて調査した。その結果、2つの課程共に重視している学生が最も高い割合を示した「子どもとのコミュニケーション」がコア・イメージの形成に影響していることが考察された。また、養護教諭養成課程学生では、子どもの気持ちを積極的に理解していく姿勢、学級担任制を取る幼稚園教諭を目指す学生では、仕事内容全般への関心とコミュニケーション方法への関心が高い割合を示した。これは、それぞれの職場集団における役割の性質を反映していることが考察された。

キーワード：対人支援、職業観、養護教諭、幼稚園教諭、コア・イメージ

I. 問題

戦後の高度成長期以降、少子化、核家族化に伴う血縁・地縁関係による支え合いの希薄さが指摘される社会情勢が進む中で、子どもに関わる教育や医療・福祉の現場における職業では、専門的な対人支援力の向上が求められて来ている。そして、それぞれの養成課程の免許・資格取得においても、職業意識・援助技術の向上のために、対人援助力と関連する専門科目の学習・実習の充実が望まれるようになった。しかし、それだけでなく、学生自身が、《子ども・人》の育ちに望ましい社会的環境とは何かを問う姿勢の養成こそが、《子ども・人》の成長・発達支援における現代的な教育課題ではないのだろうかと考え、つぎの2つの重要な観点から上げられる。第一、《子ども・人》の支援の専門性を向上するにあたり、対人支援力の希薄さが問われている時代に育った学生が、現在の教育のなかで形成してきた職業観を確認することは重要である。第二、両者を合わせると、対象を幼稚園から、小・中学校および高等学校までの教育課程における、《子ども・人》の成長・発達支援の共通点に注目することは

重要である。そのために、本研究では、養護教諭・幼稚園教諭養成課程における学生の職業観を調べ、その実態を知り、子どもに関わる対人支援力を求められる職業を志望する学生のコア・イメージを探索的な検討を試みることにした（ここでのコア・イメージとは、《子ども・人》の成長・発達の支援にかかわる職業について、学生が捉えているその職業を構成している概念に関して持つイメージとして考える）。

学生の職業意識の調査研究では、養護教諭養成課程の学生を対象にした川野・桑原（2012）が上げられる。川野らは、学生は、「子どもとのコミュニケーション」を養護教諭の重視すべき職業であると考えていると述べている。したがって、「子どもとのコミュニケーション」は職業のコア・イメージの形成に重要であると考えられることができる。しかし、これまでに短期大学における養護教諭養成課程と幼稚園教諭養成課程、両者を取り上げて職業観の特徴に着目した研究はほとんどみられない。岡堂（1988）は、保健室の機能に関する視点から、子どもに関わる対人支援力とは、それぞれの発達過程に在る子どもの姿を、『いずれは問題に立ち向かう勇気をもてるような援助』と『逃げる場所としての援助』について述べている。いいかえれば、「未来を生きる力の支援」と「いまを生きる力の支援」とを続けることであるといえよう。また、岡堂らは、「言葉以外に相手が表現しているものは、相手の気持ちを理解するうえで、言葉以上に大切なものである」とも述べる。言葉以外でのコミュニケーションが主体となっている年齢の低い子どもほど言葉以上にその表情や身ぶりによってコミュニケーションを行っている。言葉の世界で閉じることなく行われているコミュニケーションは、心と身体が発達にかかわる保育者に期待される支援であると考えられる。そこで、ここでは、それぞれの養成課程の学生についても保育者像を尋ねることとした。

本研究では、子どもの援助や支援の能力を身につけることが求められている養護教諭養成課程と幼稚園教諭養成課程、2つの職業観の実態を明らかにすることを試みる。そして、両者を調査することで、多様な領域に渡る《子ども・人》の援助や支援力が求められる学生の職業観のそれぞれの特徴を調べ、その基底にあるものの理解を目指していく。そのため調査1では、養護教諭養成課程の学生を対象とし、調査2では幼稚園教諭養成課程の学生を対象とした職業観の調査を行う。最後に、調査1と調査2による総括的考察を加えることとする。

II. 目的

《子ども・人》に関わる対人支援力を求める職業を目指す2つの養成課程に在籍する学生の職業観の実態を知り、その両者に共通していると考えられる職業観のコア・イメージの検討を試みる。そのために、調査1では、養護教諭養成課程の学生の職業観を調べる。そして、養護教諭養成課程学生と川野・桑原（2012）の報告と比較対照した考察を加える（(1)～(3)の項目。なお、本研究では、調査協力者に養護教諭養成課程専攻科1, 2年生を加え、本科1, 2年生と比較対照した検討を加える）。つぎに、調査2では、幼稚園教諭養成課程の学生の職

業観を調べる。そして、養護教諭養成課程学生と、幼稚園教諭養成課程の学生とを比較対照して検討する。

調査1と2の結果により、「子どもとのコミュニケーション」は、《子ども・人》に関わる対人支援力を求められる職業のコア・イメージであるかどうかの検討を進める。さらに、幼稚園教諭に限定せず、保育士も含めた保育者についても検討を加えて行く。

Ⅲ. 方法

1. 調査1

①調査協力者：九州地方Y県A短期大学の養護教諭養成課程に在籍する学生194人（本科1年生：78人、2年生：81人。専攻科1年生：16人、2年生：19人）である。

※ A短期大学の本科とは短期大学1,2年生に、専攻科1,2年生は4年制大学の3,4年次の学年にあたる。

※ A短期大学では、本科2年卒業次で養護教諭2種免許状、専攻科2年修了次で養護教諭1種免許状の取得を目指している。A短期大学の養護教諭教員養成課程では、本調査時の専攻科1年生（4年制大学3年次にあたる）が本科2年生次の4月に学科の改組転換（学科名称変更も含む）が行われている。本科1,2年生と専攻科1,2年生は養護教諭養成課程という点で共通している（調査実施時）。

②実施期間：平成24（2012）年7月上旬。調査協力者が受講する授業担当者に調査者が協力依頼のうえ、各授業時間の初めに、調査者が調査目的等を説明の上で実施した。所要時間15分を設け、質問紙はその場で回収した（※当該授業の出席者に調査協力を依頼。回収率100%）。

③調査方法：質問紙法。質問項目の内容、回答方法は、表1-1を参照。質問項目番号（1）～（3）は川野・桑原（2012）を引用した。（4）、（5）は筆者らが考えて作成した。

2. 調査2

①調査協力者：A短期大学の幼稚園教諭養成課程に在籍する160人（1年生：83人、2年生77人）。②実施期間：平成24（2012）年7月中旬。その他は、調査1と同様である。

③調査方法：質問紙法。質問項目の内容、回答方法は、表1-2参照。質問項目番号（1）～（3）は川野・桑原（2012）を幼稚園教諭養成課程向けに改定した。その他は、調査1と同様である。

表 1-1 調査 1 の質問項目の概要

質問項目番号	質問項目:カテゴリー	質問項目数	質問方法
(1)	養護教諭を目指している理由	10	4件法
(2)	養護教諭の職務について重視したいこと	10	4件法
(3)	働くときに大切にしたいこと	9	4件法
(4)	一番働きたい職場	12	選択法
(5)	保育者像のイメージ	3	4件法

表 1-2 調査 2 の質問項目の概要

質問項目番号	質問項目:カテゴリー	質問項目数	質問方法
(1)	保育者を目指している理由	10	4件法
(2)	保育者の職務について重視したいこと	10	4件法
(3)	働くときに大切にしたいこと	9	4件法
(4)	一番働きたい職場	12	選択法
(5)	保育者像のイメージ	3	4件法

IV. 調査 1 の結果と考察

調査 1 の結果を図 1～2 および表 2～4 に示す。

(1) 養護教諭を目指している理由

結果を表 2 に示す。本研究では、養護教諭を目指している理由として「子どもの気持ちを理解し支えになりたいから」の項目に「4：当てはまる」と答えた学生が、最も高い割合を、三者とも示した（80.33%：本科、74.07%：専攻科、72%：川野・桑原（2012））。

χ^2 検定を、4件法の「4：当てはまる」と、それ以外の「3：やや当てはまる」、「2：あまり当てはまらない」、「1：当てはまらない」)において行った。本科では、「②評価しないところ」($\chi^2(1) = 30.67$)、「③仕事内容への興味関心」($\chi^2(1) = 10.75$)、「⑤気持ちを理解し支えたい」($\chi^2(1) = 36.80$)、「⑥心身の健康を守りたい」($\chi^2(1) = 24.19$)、「⑨好きになれなかった」($\chi^2(1) = 80.05$)、「⑩給料の安定」($\chi^2(1) = 37.71$)において、 $p < 0.01$ で有意であった。また、「④学校現場で働きたい」($\chi^2(1) = 3.87$)において、 $p < 0.05$ で有意であった。専攻科では、「②評価しないところ」($\chi^2(1) = 23.18$)、「⑤気持ちを理解し支えたい」($\chi^2(1) = 23.17$)、「⑦気持ちを理解するのが得意」($\chi^2(1) = 6.72$)、「⑧医療福祉への興味」($\chi^2(1) = 49.53$)、「⑨好きになれなかった」($\chi^2(1) = 100.00$)、「⑩給料の安定」($\chi^2(1) = 72.56$)において、 $p < 0.01$ で有意であった。専攻科では、支援に関しての理解が進んでいることが示唆される。

川野・桑原（2012）では、「②評価しないところ」($\chi^2(1) = 31.36$)、「⑤気持ちを理解し支えたい」($\chi^2(1) = 19.36$)、「⑥心身の健康を守りたい」($\chi^2(1) = 12.96$)、「⑧医療福祉への興味」($\chi^2(1) = 10.24$)、「⑨好きになれなかった」($\chi^2(1) = 67.24$)、「⑩給料の安定」($\chi^2(1) = 33.64$)において、 $p < 0.01$ で有意であった。本研究の本科に比べて、有意な項目数が絞られていることが分かる。

表2 養護教諭を目指している理由

養護教諭養成課程: 本科(1年生:72人、2年生:66人、合計:138人)										
質問項目①~⑩	①憧れたから	②評価しないところ	③仕事内容への興味関心	④学校現場で働きたい	⑤気持ちを理解し支えたい	⑥心身の健康を守りたい	⑦気持ちを理解するのが得意	⑧医療福祉への興味	⑨好きになれなかった	⑩給料の安定
4:当てはまる	54.55	22.31	66.39	40.16	80.33	74.59	44.26	42.62	5.26	19.30
3:やや当てはまる	22.31	23.14	29.51	35.25	16.39	22.95	40.98	31.97	5.26	41.23
2:あまり当てはまらない	11.57	33.06	2.46	19.67	3.28	2.46	13.11	20.49	21.05	22.81
1:当てはまらない	11.57	21.49	1.64	4.92	0.00	0.00	1.64	4.92	68.42	16.67
養護教諭養成課程: 専攻科(1年生:15人、2年生:14人、合計:29人)										
4:当てはまる	44.44	25.93	59.26	48.15	74.07	55.56	37.04	14.81	0.00	7.41
3:やや当てはまる	22.22	48.15	40.74	29.63	25.93	40.74	40.74	37.04	7.41	33.33
2:あまり当てはまらない	0.00	18.52	0.00	11.11	0.00	3.70	22.22	40.74	11.11	48.15
1:当てはまらない	3.70	7.41	0.00	11.11	0.00	0.00	0.00	7.41	81.48	11.11
川野・桑原(2012) (1年生:74人、2年生:55人、合計:129人)										
4:当てはまる	53	22	59	43	72	68	42	34	9	21
3:やや当てはまる	28	31	31	31	22	26	40	43	7	40
2:あまり当てはまらない	9	32	6	18	1	2	14	15	20	25
1:当てはまらない	10	15	4	8	5	4	4	8	64	14

※数値は回答割合(%)である。

※川野・桑原(2012)の数値は参考文献からの転載である。

※太字の数値は最も高い割合の項目を示す。

また、本研究、先行研究(川野・桑原(2012))の結果からは、学校教育の現場における養護教諭の役割は、身体的な面の保護だけに限らず、児童の心身の成熟の程度に応じ保護しその成長・発展を促進することが役割であることを学習して来ていることが示唆される。

(2) 養護教諭の職務について重視したいこと

結果を表3に示す。養護教諭の職務について重視したいこととして、「子どもとのコミュニケーション」の項目が、「4:当てはまる」に最も高い割合を三者とも示した(90.16%:本科、96.30%:専攻科、84%:川野・桑原(2012))。

χ^2 検定を、4件法の「4:当てはまる」と、それ以外の「3:やや当てはまる」、「2:あまり当てはまらない」、「1:当てはまらない」)において行った。本科では、「①ヘルスカウンセリング」($\chi^2(1) = 40.88$)、「②健康に関すること」($\chi^2(1) = 19.59$)、「③不登校への対応」($\chi^2(1) = 38.81$)、「④コミュニケーション」($\chi^2(1) = 64.51$)、「⑤緊急処置」($\chi^2(1) = 11.30$)、「⑦安全点検や情報収集」($\chi^2(1) = 8.23$)、「⑩雰囲気の良い保健室づくり」($\chi^2(1) = 63.21$)において、 $p < 0.01$ で有意であった。専攻科、川野・桑原(2012)とも、本科と同じ項目が、①~⑤と⑦、⑩とが、 $p < 0.01$ で有意であった。学生は、養護教諭の職務について、単に手当てを施すだけでなく、児童・生徒への保護とともに成長を促進する役割があることを積極的に意識していると考えられる。

表3 養護教諭の職務について重視したいこと

養護教諭養成課程:本科(1年生:72人、2年生:66人、合計:138人)												
質問項目①~⑩	①ヘルスカウ ンセリング	②健康に関 すること	③不登校等 への対応	④コミュニ ケーション	⑤救急処置	⑥個人情報 の管理	⑦安全自決 や情報収集	⑧保体行事 や保健指導	⑨ニーズの 把握	⑩雰囲気 のいい保体室 づくり	⑪食物アレ ルギーやア トピーの対応	⑫食中毒や 感染症の予 防
4:当てはまる	81.97	72.13	81.15	90.16	66.39	45.08	35.25	43.44	53.28	89.34	67.21	82.30
3:やや当てはまる	18.39	25.41	18.85	9.84	31.15	44.28	48.72	50.00	40.88	9.84	30.33	36.89
2:あまり当てはまらない	1.84	2.46	0.00	0.00	1.84	7.38	14.75	6.58	5.74	0.00	2.46	0.82
1:当てはまらない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	2.46	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
養護教諭養成課程:専攻科(1年生:15人、2年生:14人、合計:29人)												
4:当てはまる	92.59	88.89	96.30	85.19	59.26	51.85	59.26	59.26	59.26	92.59	85.19	70.37
3:やや当てはまる	7.41	11.11	11.11	3.70	14.81	40.74	48.15	40.74	40.74	7.41	14.81	29.63
2:あまり当てはまらない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
1:当てはまらない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
川野・桑原(2012) (1年生:74人、2年生:55人、合計:129人)												
4:当てはまる	74	68	75	84	71	47	36	45	53	80	56	60
3:やや当てはまる	21	30	20	11	23	36	47	43	37	16	36	33
2:あまり当てはまらない	3	2	3	3	4	13	14	10	8	2	7	5
1:当てはまらない	2	0	2	2	2	4	3	2	2	1	1	1

※数値は回答割合(%)である。
※川野・桑原(2012)の数値は参考文献からの転載である。
※太字の数値は最も高い割合の項目を示す。

(3) 働くときに大切にしたいこと

結果を表4に示す。本研究では、働くときに大切にしたいこととして、本科では「子どもへの愛情と優しさを持ちともに考えていく姿勢」の項目に「4:当てはまる」が最も高い割合を示した(92.62%)。専攻科では、「子どもの背景を知り主訴(困っていること)を理解する」と「子どもの目線に立ち共感的理解や受容する姿勢」の項目の割合が高かった(100%)。川野・桑原(2012)では「子どもの目線に立ち共感的理解や受容する姿勢」の項目の割合が最も高かった(92%)。

χ^2 検定を、4件法の「4:当てはまる」と、それ以外の「3:やや当てはまる」、「2:あまり当てはまらない」、「1:当てはまらない」)において行った。本科では、「①コミュニケーション能力」($\chi^2(1) = 54.43$)、「②関係機関との連携」($\chi^2(1) = 56.85$)、「③愛情と優しさ」($\chi^2(1) = 72.66$)、「④プライバシーの保護」($\chi^2(1) = 21.07$)、「⑤平等な対応」($\chi^2(1) = 52.04$)、「⑥自己管理」($\chi^2(1) = 47.42$)、「⑦挨拶などの礼儀」($\chi^2(1) = 34.83$)、「⑧主訴を理解する」($\chi^2(1) = 52.04$)、「⑨責任感のある冷静な判断」($\chi^2(1) = 36.80$)、「⑩共通的理解や受容」($\chi^2(1) = 69.89$)において、 $p < 0.01$ で有意であった。専攻科、川野・桑原(2012)とも、本科と同じ①~⑩の項目で $p < 0.01$ で有意であった。

三者とも、子どもの立場を尊重する点は共通であることが考察される。また、回答内容から、本研究の本科では情緒的理解の育ち、専攻科では専門的相談への認識の育ち、先行研究では、教育的な視点の育ちの割合が高いことから、それぞれの特色があることが示唆される。

表4 働くときに大切にしたいこと

養護教諭養成課程:本科(1年生:72人,2年生:66人,合計:138人)										
質問項目①~⑩	①コミュニケーション能力	②関係機関との連携	③愛情と優しさをもちともに考える	④プライバシーの保護	⑤平等な対応	⑥自己管理	⑦挨拶などの礼儀	⑧主訴を理解する	⑨責任感のある冷静な判断	⑩共感的理解や受容
4:当てはまる	86.89	87.70	92.62	72.95	86.07	84.43	79.51	86.07	80.33	91.80
3:やや当てはまる	13.11	12.30	6.56	24.59	13.93	15.57	18.85	13.11	19.67	7.38
2:あまり当てはまらない	0.00	0.00	0.82	2.46	0.00	0.00	1.64	0.82	0.00	0.82
1:当てはまらない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
養護教諭養成課程:専攻科(1年生:15人,2年生:14人,合計:29人)										
4:当てはまる	96.15	92.31	96.15	88.48	96.15	96.15	92.31	100.00	96.15	100.00
3:やや当てはまる	3.70	7.41	3.70	11.11	3.70	3.70	7.41	0.00	3.70	0.00
2:あまり当てはまらない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
1:当てはまらない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
川野・桑原(2012) (1年生:74人,2年生:55人,合計:129人)										
4:当てはまる	87	79	90	78	90	84	81	82	81	92
3:やや当てはまる	12	20	9	17	9	17	19	15	17	5
2:あまり当てはまらない	1	1	1	4	1	4	0	2	2	2
1:当てはまらない	0	0	0	1	0	1	0	1	0	1

※数値は回答割合(%)である。

※川野・桑原(2012)の数値は参考文献からの転載である。

※太字の数値は最も高い割合の項目を示す。

(4) 一番働きたいと思う職場について

結果を図1に示す。ここでは、一番働きたいと思う職場について「小学校」の選択肢が高い割合を示した(44%:本科,38%:専攻科)。これは、A短期大学では、本科の段階で小学校に実習に行っていること、また、次の(5)の保育者のイメージの項目で最も「当てはまる(4)」と回答した割合が高かった「子どもが好きである」と関連すると考えられる。また、専攻科において学習をより深めながら、中学校における実習を経験して、多様な見方ができるようになり、高等学校への就職についても視野を広げるようになっている可能性が考えられる。

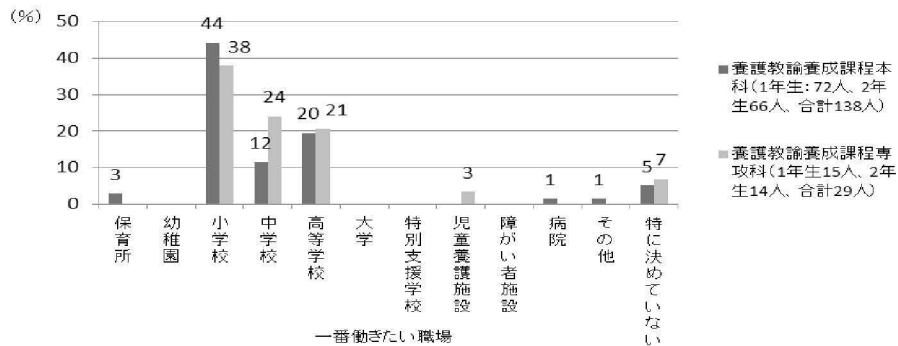


図1 養護教諭養成課程の学生の一番働きたいと思う職場
(本科1・2年生と専攻科1・2年生)

(5) 保育者のイメージ

結果を図 2-1,2-2 に示す。

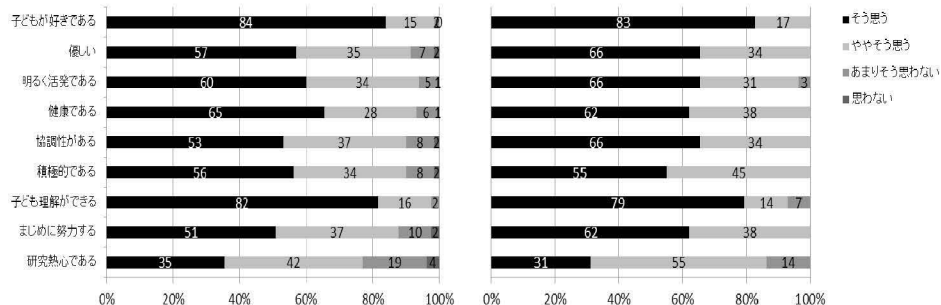


図 2-1 養護教諭養成課程の学生の
保育者のイメージ (本科 1・2 年生)

図 2-2 養護教諭養成課程の学生の
保育者のイメージ (専攻科 1・2 年生)

ここでは、保育者のイメージとして「子どもが好きである」の項目が高い割合を示した(本科:84%、専攻科83%)。また、全項目において、ほとんどの学生が「当てはまる(4)」と回答していることから、全項目とも保育者のイメージとともに、学生が考える養護教諭のイメージでもあることが考えられる。

＜調査 1 の養護教諭養成課程における本研究と川野・桑原(2012)と比較検討＞

(1) 養護教諭を目指している理由は、「子どもの気持ちを理解し支えになりたいから」だった。(2) 養護教諭の職務について重視したいことは、「子どもとのコミュニケーション」だった。これらは川野・桑原(2012)と同様の結果であった。(3) 働くときに大切にしたいことは、本研究では「子どもへの愛情と優しさをともに考えていく姿勢」であった。一方、川野・桑原(2012)では「子どもの目線に立ち共感的理解や受容する姿勢」であり、異なる結果であったが、両者とも子どもへの援助的な姿勢がうかがわれる。養護教諭を目指す理由や職務理解において、子どものよき相談者、理解者、支援者であることが重要な仕事であるという職業観が育成されていることが考えられる。

V. 調査 2 の結果と考察

結果を図 3～図 4 および表 5～表 7 で示す。調査実施時の授業時間における回収率は 100%であった。

(1) 保育者を目指している理由：結果を表 5 に示す。幼稚園教諭養成課程の本科の学生が、保育者を目指している理由として「保育者の仕事内容に興味・関心があったから」の項目に高い割合を示した(63.36%)。これは調査 1 の結果と異なる。保育者の仕事内容は、子どもの心身の発達を援助するものが多く、「(5) の保育者のイメージ」の回答との関連が考えら

れる。

表5 保育者を目指している理由（幼稚園教諭養成課程）

幼稚園教諭養成課程(1年生:72人、2年生68人、合計140人)										
質問項目①～⑩	①憧れたから	②評価しないところ	③仕事内容への興味関心	④保育(学校)現場で働きたい	⑤気持ちを理解し支えたい	⑥心身の健康を守りたい	⑦気持ちを理解するのが得意	⑧保育(医療)や福祉への興味	⑨好きになれなかった	⑩給料の安定
4:当てはまる	37.40	6.20	63.36	56.49	61.83	48.09	29.01	58.78	5.26	11.30
3:やや当てはまる	26.72	22.48	33.59	29.01	32.06	40.46	41.98	36.64	12.28	22.61
2:あまり当てはまらない	22.90	37.21	2.29	10.69	6.11	10.69	23.66	3.05	16.67	30.43
1:当てはまらない	12.98	34.11	0.76	3.82	0.00	0.76	5.34	1.53	65.79	35.65
養護教諭養成課程:本科(1年生:72人、2年生:66人、合計:138人)										
4:当てはまる	54.55	22.31	66.39	40.16	60.33	74.59	44.26	42.62	5.26	19.30
3:やや当てはまる	22.31	23.14	29.51	35.25	16.39	22.95	40.98	31.97	5.26	41.23
2:あまり当てはまらない	11.57	33.06	2.46	19.67	3.28	2.46	13.11	20.49	21.05	22.81
1:当てはまらない	11.57	21.49	1.84	4.82	0.00	0.00	1.64	4.92	68.42	16.67
養護教諭養成課程:専攻科(1年生:15人、2年生:14人、合計:29人)										
4:当てはまる	44.44	25.93	59.26	48.15	74.07	55.56	37.04	14.81	0.00	7.41
3:やや当てはまる	51.85	48.15	40.74	29.63	25.93	40.74	40.74	37.04	7.41	33.33
2:あまり当てはまらない	0.00	18.52	0.00	11.11	0.00	3.70	22.22	40.74	11.11	48.15
1:当てはまらない	3.70	7.41	0.00	11.11	0.00	0.00	0.00	7.41	81.48	11.11

※数値は回答割合(%)である。

※太字の数値は最も高い割合の項目を示す。

※養護教諭養成課程本科・専攻科(再掲)

χ^2 検定を、4件法の「4:当てはまる」と、それ以外の「3:やや当てはまる」、「2:あまり当てはまらない」、「1:当てはまらない」)において行った。幼稚園教諭養成課程では、「①憧れたから($\chi^2(1) = 18.36$)」、「②評価しないところ」($\chi^2(1) = 69.03$)、「③仕事内容への興味関心」($\chi^2(1) = 11.73$)、「④保育現場で働きたい」($\chi^2(1) = 12.65$)、「⑤気持ちを理解し支えたい」($\chi^2(1) = 12.10$)、「⑦気持ちを理解するのが得意」($\chi^2(1) = 13.23$)、「⑧保育や福祉への興味」($\chi^2(1) = 6.69$)、「⑨好きになれなかったから」($\chi^2(1) = 78.07$)、「⑩給与の安定」($\chi^2(1) = 51.70$)において、 $p < 0.01$ で有意であった。「①評価しないところ」、「⑥心身の健康を守りたい」のとくに養護教諭の特色と共通すると項目を除く、すべての項目で有意だった。保育者を目指す理由は、園で働く幼児の先生としての役割への憧れ・関心にあることが考えられる。

(2) 保育者の職務について重視したいこと：結果を表6に示す。全般的にとらえると調査1と同様の傾向が示唆されており、保育者にとっての対象は乳児や幼児であり、言葉で気持ちを伝えることが難しい年齢であることとの関連が考えられる。そのため、絵本や遊具等を使用し、少しでも子どもの気持ちを汲み取れるように、コミュニケーションを重視していることが考えられる。

表6 保育者の職務について重視したいこと (幼稚園教諭養成課程)

幼稚園教諭養成課程(1年生:72人、2年生68人、合計140人)												
質問項目①~⑫	①保育(ヘルス)カウンセリング	②健康に関すること	③登園しぶり(不登校)等への対応	④コミュニケーション	⑤救急処置	⑥個人情報や個人情報の管理	⑦安全点検や情報収集	⑧保育(保健)行事や保育(保健)指導	⑨ニーズの把握	⑩雰囲気の良い育施設(保健室)づくり	⑪食物アレルギーやアトピーの対応	⑫食中毒や感染症の予防
4:当てはまる	37.89	33.85	44.82	82.31	37.21	26.15	25.00	55.38	49.23	73.08	49.23	48.46
3:やや当てはまる	48.92	52.31	45.38	18.15	51.16	48.46	53.13	38.46	44.82	25.38	40.00	40.00
2:あまり当てはまらない	13.85	12.31	8.46	1.54	10.85	23.85	18.75	5.38	6.15	1.54	10.00	10.77
1:当てはまらない	1.54	1.54	1.54	0.00	0.78	1.54	3.13	0.77	0.00	0.00	0.77	0.77
養護教諭養成課程:本科(1年生:72人、2年生:66人、合計:138人)												
4:当てはまる	81.97	72.13	81.15	90.16	88.39	45.08	35.25	43.44	53.28	89.34	87.21	82.30
3:やや当てはまる	16.39	25.41	16.85	9.84	31.15	44.28	46.72	50.00	40.98	9.84	30.33	36.89
2:あまり当てはまらない	1.64	2.46	0.00	0.00	1.64	7.38	14.75	6.58	5.74	0.00	2.46	0.82
1:当てはまらない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	2.46	2.46	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
養護教諭養成課程:専攻科(1年生:15人、2年生:14人、合計:29人)												
4:当てはまる	92.59	88.89	96.30	85.19	85.19	51.85	59.28	59.28	59.28	92.59	85.19	70.37
3:やや当てはまる	7.41	11.11	11.11	3.70	14.81	40.74	48.15	40.74	40.74	7.41	14.81	29.63
2:あまり当てはまらない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
1:当てはまらない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

※数値は回答割合(%)である。

※太字の数値は最も高い割合の項目を示す。

※養護教諭養成課程本科・専攻科(再掲)

χ^2 検定を、4件法の「4:重視する」と、それ以外の「3:やや重視する」、「2:あまり重視しない」、「1:重視しない」)において行った。幼稚園教諭養成課程では、「②健康に関すること」($\chi^2(1) = 6.92$)、「④コミュニケーション」($\chi^2(1) = 56.92$)、「⑥個人情報の管理」($\chi^2(1) = 14.85$)、「⑦安全点検や情報収集」($\chi^2(1) = 16.25$)、「⑩雰囲気の良い保育施設づくり」($\chi^2(1) = 29.60$)において、 $p < 0.01$ で有意であった。また「①保育カウンセリング」($\chi^2(1) = 4.18$)、「⑤救急処置」($\chi^2(1) = 4.26$)、「⑧保育行事や保育指導」($\chi^2(1) = 4.22$)において、 $p < 0.05$ で有意であった。有意差が無かった「③登園しぶり」、「⑨ニーズの把握」、「⑪食物アレルギーやアトピーの対応」、「⑫食中毒や感染症の予防」は、支援におけるより専門的な項目内容であり、学生にとっては未だ現実的な認識は未熟な領域であること、それと同時に保育者以外の他の専門職種との連携において補充して行くべき支援領域であることが考えられる。

(3) 働くときに大切にしたいこと

結果を表7に示す。幼稚園教諭養成課程の本科の学生が、働くときに大切にしたいこととして「子どもへの愛情と優しさを持ちともに考えていく姿勢」の項目に高い割合を示した(87.60%)。調査1の結果も同様で、学生は保育者として働く際に、愛情と優しさを持ち合わせて子どもと関わろうとする姿勢がうかがえる。

χ^2 検定を、4件法の「4:大切にしたい」と、それ以外の「3:やや大切にしたい」、「2:あまり大切にしない」、「1:大切にしない」)において行った。幼稚園教諭養成課程では、「①コミュニケーション能力」($\chi^2(1) = 34.03$)、「②関係機関との連携」($\chi^2(1) = 36.91$)、「③愛情と優しさ」($\chi^2(1) = 72.94$)、「④プライバシーの保護」($\chi^2(1) = 9.50$)、「⑤平等な対応」($\chi^2(1) = 69.96$)、「⑥自己管理」($\chi^2(1) = 42.78$)、「⑦挨拶などの礼儀」($\chi^2(1) = 56.01$)、「⑧主訴を理解する」($\chi^2(1) = 28.84$)、「⑨責任感のある冷静な判断」($\chi^2(1) = 15.70$)、「⑩共感的理解や受容」($\chi^2(1) = 50.86$)のすべての項目において、 $p < 0.01$ で有意であった。

学生段階においても、就職して間もなく、クラス集団を運営して行く保育者という職種では、多様な子ども・保護者とのかかわり、また、職員同士の連携が重要であるということがとらえられていることが考えられる。

表7 働くときに大切にしたいことの質問項目（幼稚園教諭養成課程）

幼稚園教諭養成課程(1年生:72人、2年生68人、合計140人)										
質問項目①~⑩	①コミュニケーション能力	②関係機関との連携	③愛情と優しさ	④プライバシーの保護	⑤平等な対応	⑥自己管理	⑦挨拶などの礼儀	⑧主訴を理解する	⑨責任感のある冷静な判断	⑩共感的理解や受容
4:当てはまる	75.78	78.74	87.80	83.57	86.82	78.91	82.95	73.64	67.44	81.40
3:やや当てはまる	21.09	20.93	10.08	33.33	11.63	19.53	15.50	21.71	29.46	17.83
2:あまり当てはまらない	3.13	2.33	2.33	3.10	1.55	1.55	1.55	4.65	3.10	0.78
1:当てはまらない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
養護教諭養成課程:本科(1年生:72人、2年生:66人、合計:138人)										
4:当てはまる	86.89	87.70	92.82	72.95	86.07	84.43	79.51	86.07	80.33	91.80
3:やや当てはまる	13.11	12.90	6.56	24.59	13.93	15.57	18.85	13.11	19.67	7.28
2:あまり当てはまらない	0.00	0.00	0.82	2.46	0.00	0.00	1.64	0.82	0.00	0.82
1:当てはまらない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
養護教諭養成課程:専攻科(1年生:15人、2年生:14人、合計:29人)										
4:当てはまる	96.15	92.31	96.15	88.48	96.15	96.15	92.31	100.00	96.15	100.00
3:やや当てはまる	3.70	7.41	3.70	11.11	3.70	3.70	7.41	0.00	3.70	0.00
2:あまり当てはまらない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
1:当てはまらない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00

※数値は回答割合(%)である。

※太字の数値は最も高い割合の項目を示す。

※養護教諭養成課程本科・専攻科は再掲

(4) 一番働きたいと思う職場について：結果を図3に示す。幼稚園教諭養成課程の本科の学生が、一番働きたい職場について「幼稚園」の選択肢に高い割合を示した(44%)。調査1と比較すると、ほとんどの学生が幼稚園と保育所を希望していることから、幼稚園教諭養成課程の学生は目指す職業が明確であるのではないかと推測される。

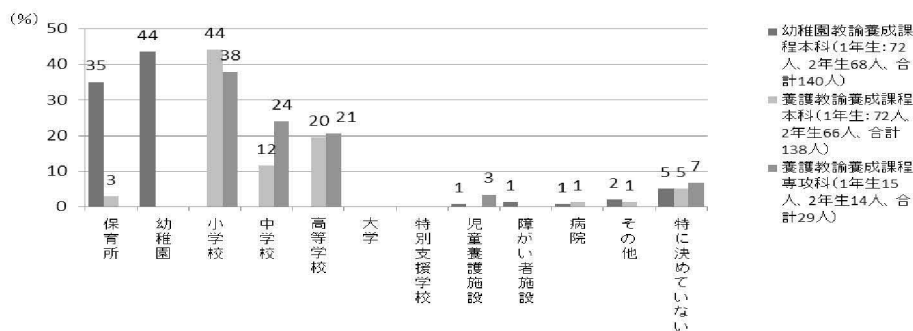


図3 2つの養成課程の学生の一番働きたい職場

(幼稚園教諭養成課程：本科1・2年生と養護教諭養成課程：本科1・2年生、専攻科1・2年生)

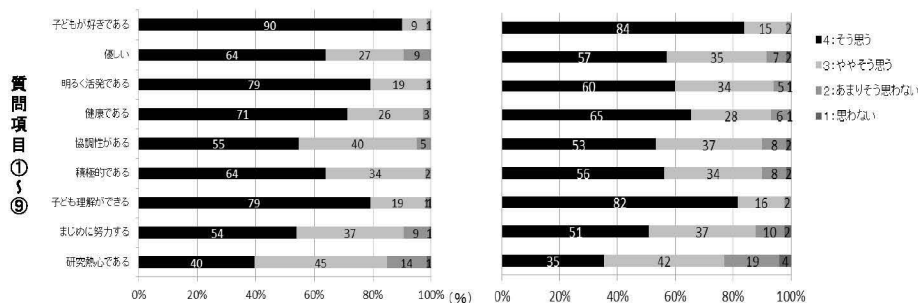


図4 2つの課程の学生の保育者のイメージ
(幼稚園教諭養成課程：本科1・2年生(左)、養護教諭養成課程：本科1・2年生(右))

(5) 保育者のイメージ：図4参照。幼稚園教諭養成課程本科学生が、保育者のイメージとして「子どもが好きであること」の項目に高い割合を示した(90%)。学生が今まで関わってきた保育者のイメージとともに、学生自身子どもが好きであることが考えられる。

VI. 総括的考察

(1) 養護教諭・幼稚園教諭養成課程の学生が、それぞれの職業を目指している理由

養護教諭を目指している理由では、「子どもの気持ちを理解し支えになりたいから」が目立って高かった(図1)。しかし、幼稚園教諭養成課程では「保育者の仕事内容に興味・関心があったから」が最も顕著だった(図10)。これを養護教諭、幼稚園教諭の職務上の性質の違いが反映された結果としてとらえると、「担任」を持つ・持たないの違いが重要であることが考察される。

(2) 職務について重視したいこと

養護教諭養成課程、幼稚園教諭養成課程の学生ともに職務について重視したいことで目立って高かったのは、「子どもとのコミュニケーション」であり、両者とも共通の認識を持っていた(表3と表6)。児童生徒と関わる養護教諭は、児童生徒への教育的指導とともに、心身の健康の教育的支援者であることから、児童生徒に対して個別に積極的にコミュニケーションをとっていくのではないかと考える。一方、乳児や幼児を対象とする保育者は、絵本の読み聞かせや、一緒に遊ぶことからコミュニケーションをとっていくのではないかと考えられる。

(3) 働くときに大切にしたいこと

養護教諭養成課程・幼稚園教諭養成課程の学生ともに、働くときに大切にしたいことが顕著だったのは、「子どもへの愛情を持ちともに考えていく姿勢」であり、両者とも共通の認識を持っていることが示された(表4と表7)。両者ともに、それぞれの職業で働く際、子どものあり方を暖かく受け入れながら、支えていく姿勢を大切にしたいことが考察される。

(4) 一番働きたいと思う職場について

一番働きたいと思う職場について、養護教諭養成課程の本科、専攻科とも実習体験のある「小学校」の選択は多いが、専攻科では実習体験より「中学校」も大きく視野に入ってきている。なお、いずれも実習体験のない「高等学校」については両者の差は余り見られなかった。幼稚園教諭養成課程の学生では、ともに実習体験の機会のある「幼稚園」「保育所」の選択が多かった(図13)。したがって、実習体験(予定)の有無が職場の希望に影響することが示唆される。

(5) 保育者のイメージについて

保育者のイメージについて、養護教諭養成課程、幼稚園教諭養成課程の学生ともに「子どもが好きである」と回答した割合が最も高く、共通の認識を持っていることが示された(図2と図4)。両課程の学生とも、子どもが好きである学生が多く、それぞれの健康指導や保育指導の専門性ととも選択の重要な要因としていることが考えられる。

以上のことから、子どもの対人支援力を求められる異なる2つの養成課程の学生の職業観に、その特徴となる点とともに、共通する点を見出すことが出来た。両課程とも、特に子どもとの関わりを重視していた。子どもへの保育に限らず、保護者に対する子育て支援・保育カウンセリング技術も現場では求められていることも具体的な理由になるかもしれない。養護教諭養成課程では目指す専門的理由が明示的であり、重視されている傾向が読み取れる。一方、幼稚園教諭養成課程では、仕事内容全般を通したコミュニケーションの方法を重視していると捉えられる。これは、児童生徒の成績を評価しない養護教諭と、クラス担任(複数担任制を含む)という幼稚園教諭・保育士等の職務上の性質の特徴を反映していることが考察される。子どもにかかわる対人支援を求められる職業を目指すときのコア・イメージは、『子どもとのコミュニケーション』の姿勢の重視といえるだろう。そこでの子どもの支援方法のスタイルは異なるが、その背景には子どもが好きであるという動機となるものがあるようだ。そして、それは、広い意味における保育者の性質とも共通しているようである。ただ、そのあり方、内容については、今後、仮説検証型の研究方法も取り入れながら、どのような心のあり方とそれぞれに関連しているのかを確認していくことが重要である。

謝辞 本研究にご協力していただきましたA短期大学の皆様に心からの感謝を申し上げます。

追記 本論文は、上原江未里(九州女子短期大学専攻科養護教育学専攻2年)が、九州女子短期大学専攻科養護教育学専攻、科目「修了研究Ⅱ(指導教員 准教授小沢日美子)」において提出した「養護教諭・幼稚園教諭養成課程における学生の職業観の特徴」を再分析・再構成したものである。

参考文献

1. 岡堂哲雄・坂田三允『養護教諭のためのカウンセリング技術』（保健指導実践講座，6）（1988），ぎょうせい，pp.1-117.
2. 河野志穂「文系大学生のインターンシップが大学での学びに与える効果：早稲田大学を事例として（高良記念研究助成論文，I 研究論文の部）」『日本インターンシップ年報』14，（2011），pp.9-15.
3. 川野 司・桑原友希「養護教諭を目指す学生の職業意識調査」『九州女子大学紀要』48(2)，（2012），pp.37-51.
4. 菊池紀子・佐島群巳「養護教諭養成における実践的指導力形成に関する研究」『帝京短期大学紀要』13，（2004），pp.105-132.
5. 厚生労働省「第3編社会福祉 第2章 児童福祉・母子福祉」『厚生統計要覧（平成23年度）』，（2012）.
6. 小棹理子・伊藤善隆・田村新吾・岩崎敏之・藤澤みどり・高橋可奈子・原満・住谷勉・佐藤明宏・小林久美子・石田英弥「高大連携による教育交流ネットワークの構築：コミュニケーション教育研究会の活動とコミュニケーションリテラシー」『湘北紀要』30，（2009），pp.97-117
7. 後藤多知子・中林恭子「『保健室の先生をめざす会』の実践に関する一研究」『瀬木学園紀要』6，（2012），pp.63.
8. 財団法人日本学校保健会「保健室利用状況に関する調査報告書（平成18年度調査）」『財団法人日本学校保健』，（2008），pp.1-125.
9. 作田澄泰・中山芳一「コミュニケーション行為による自己肯定感向上に関する研究—キャリア教育の視点からみた道徳授業実践を通じて—」『岡山大学教師教育開発センター紀要』2，（2012），pp.14-23.
10. 汐見和恵「保育者の役割と保育者に求められる専門性—今求められている子育て・子育て支援のコンピテンシー」『東京文化短期大学こども教育研究所紀要』2，（2007），pp.31-42.
11. 長根利紀代「保育者を目指す学生の「自覚」について：教育実習を通して」『名古屋柳城短期大学 研究紀要』25，（2003），pp.77-92.
12. 平野大昌「インターンシップと大学生の就業意識に関する実証研究」『生活経済学研究』31，（2010），pp.49-65.
13. 藤田 文「子どもと大学生のコミュニケーション—コミュニケーションスキルに関する認識の変化を中心に」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』42，（2004），pp.117-129.
14. 丸山浩枝「小児看護実習における乳児および幼児前期の子どもを受け持つ学生指導のあり方：学生と子どもとのコミュニケーションに視点をあてて」『神戸市看護大学短期大学部紀要』24，（2005），pp.45-53.

-
15. 横山勝英「大学生の職業意識に関する一考察(西口光博教授追悼号)」『龍谷大学経営学論集』46(3/4), (2007), 61-79.

What is the core image when aspiring for the occupation requiring personal support power in connection with children and humans?

Himiko OZAWA , Emiri UEHARA

Kyushu Women's Junior College Department of Childhood Care and Education
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, Fukuoka, 807-8586, Japan

Abstract

In recent years, more special personal support power has been demanded in the fields of education, medical treatment and welfare, related to the growth and development of children and humans. In considering the way of development of personal support power, it is very important to know the work values of the student aspiring for such career. Here, we focused on the roles of teachers in charge of health education and kindergarten teachers.

The purpose is to identify the characteristics of the work values of the students, and to examine the core image of the job supporting the growth and development of children and humans. Those surveyed are 354 junior college students composed of 194 students in the teacher-in-charge-of-health-education training course (survey 1), and 160 students in the kindergarten teacher training course (survey 2). We conducted the surveys using questionnaire forms for every major and grade. The posture that places emphasis on communication with children was shown in the students in both courses, and considered to affect the core image. Moreover, in the students of the teacher-in-charge-of-health-education course, the posture to understand children's feelings positively was suggested. As for students aspiring for a teacher of kindergarten, which takes a class teacher system, the interest in the whole job and the interest in the communication method were suggested. It is thought that these features are reflecting the characteristics of the role in each place-of-work group.

Key words : Personal assistance, Work values, Teacher in charge of health, Kindergarten teacher, Core image